古代史を解明する会　　2023年12月9日

第36回「日向三代の記述の理由」

-討論の為の議題を提供-

丸地三郎

日向三代の記述の理由

1　年数・代数をかせぐために追加された
2　史実を神話化して隠ぺいした
3　ほぼ史実どおり
4　日向三代の場所は何処？

- このテーマが提案された目的は、上記を明らかにしたいとのことかと思います。

- 改めて、古事記・日本書紀の記述と注記を読んで、考えた結果、以下のようなテーマで議論を交わしたいと考え、議題を提供
- します。

テーマ 1.：　天孫降臨し、邇邇芸命の結婚相手を見つけた場所は何処か？
テーマ 2.：　真床追衾・真床覆衾(まとこおうふすま)とは 何か？
テーマ 3.：　天孫降臨の時期は、何時か？
- 出雲国譲りの後か？
- 天岩戸事件の後か？

テーマ 4.：　天孫降臨に参加して人の規模は？
- 十数人程度の少数　？
- 数百人規模　？
- 数千人規模　？

テーマ 5.：　記述の理由は？
1　年数・代数をかせぐために追加された
2　史実を神話化して隠ぺいした
3　ほぼ史実どおり

テーマ 6.：　日向三代の場所を知るには、どんな証拠が有るのか？

日向三代の記述の留意点

- 日向三代の天孫族の神話は、古事記・日本書紀の両方に記載されている。
  - 国譲り → 終了後 → 天孫降臨 → 日向三代 → 神武東征 の順に記載。

- しかし、対比される出雲族の大国主の神話は、古事記にはあるが、日本書紀には無い
  - 日本書紀では、➪天岩戸 ➪素戔嗚追放 ➪八岐大蛇退治 ➪ 出雲に住まう ➪**大国主誕生** ➪国譲りと繋がる。
  - 日本書紀（本文）では、**大国主が素戔男尊の子として誕生し**、以下の大国主の神話（古事記記載）は無い。
    - 八十神の八上比売への求婚・因幡の白兎
    - 八上比売の大国主選択
    - 八十神の迫害
    - 根の国訪問（須佐之男命の娘と結婚と試練＝蛇・百足/蜂・野火/鼠・五百引きの石・黄泉平坂）

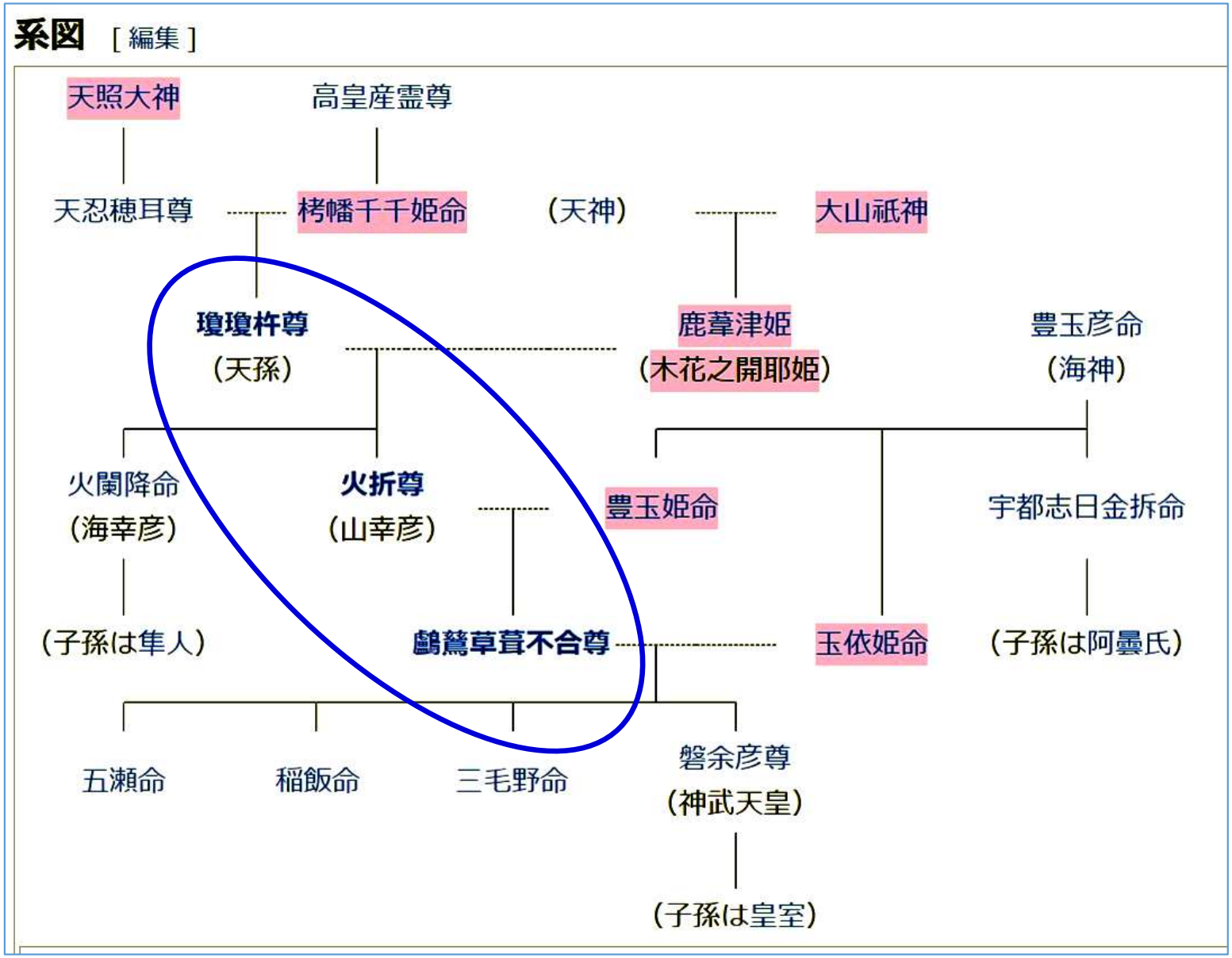
日向三代とは？

その主役となるのが「日向三代」と呼ばれる神々で、

- 高天原から降臨した邇邇芸命
  （ニニギノミコト）
- 火遠理命
  （ホオリノミコト）
- 鵜草葺不合命
  （ウガヤフキアエズノミコト）

までの3代の神々を指す。

右図は Wikipedia より



日向三代:記紀の記述

- 日向三代の神話
  - ✓ **天孫降臨**で、
    - 天児屋命など主要な人物を付け、三種の神器などを持ち、武装した人を伴う。
    - 筑紫の日向の国に降り、吾田の長屋の笠狭碕に立つ
    - 猿田毘古神と天宇受売命の挿話

前段

- 邇邇藝命と木花之佐久夜毘売の結婚(石長比売の挿話)
  - 笠狭の御前で、木花之佐久夜毘売(神阿多都比売)と会う
  - 醜い姉(石長比売)を追い返し、長寿では無くなる、
  - 火の産屋の出産
- 海幸彦/山幸彦の誕生
  - 海・山の狩猟用の得物の交換 ： 山幸彦が釣り針を紛失
  - 弟・火遠理命 ： 海神の宮訪問・海神の娘＝豊玉姫と結婚
  - 潮満珠・潮乾珠/海幸彦＝火照命の服従、
- 鵜葺草葺不合命の誕生
  - 豊玉姫:生む時の鰐の姿を見られ海へ帰る
  - 海神の妹＝玉依姫が乳母として来る
  - 鵜葺草葺不合命が玉依姫と結婚

後段

- ✓ 五瀬・稲飯命・三毛野命・神倭伊波毘古命(神武天皇)の誕生
  - **神武東征へ**

木花之佐久夜毘売との出会い

5　木花の佐久夜毘売

ここに天津日高日子番能邇邇藝能命、笠沙の御前に、麗しき美人に遇ひたまひき。ここに「誰が女ぞ。」と問ひたまへば、答へ白ししく、「大山津見神の女、名は神阿多都比賣、亦の名は木花の佐久夜毘賣と謂ふ。」とまをしき。

一　薩摩の国阿多郡（鹿児島県日置郡）の阿多の地に因んだ名。神は美称。
二　美人を木の花の美しさにたとえた名。

岩波文庫（ワイド版）
「古事記」 77頁
倉野憲司校注

- 古事記の日向三代の話は、木花之佐久夜毘売との出会いから始まる。
- 木花之佐久夜毘売は本名を、
  神阿多都比売（かむあたつひめ）と云い
  注）には：**薩摩**の阿多の地に因んだ名前とある。
- 日本書紀を確認すると、
  1. 鹿葦津姫
  2. 神吾田津姫
  3. 木花之開耶姫

  3つの名前が記されている。

注）には：鹿葦津姫は　**九州南部**の地名であろう。**大隅隼人**の加志公島麻呂の名が示される。

その前段に「吾田の長屋の笠狭碕」の注が示されている。（次頁参照）

果たして、薩摩＝鹿児島の話なのだろうか？

岩波文庫

日本書紀
巻第二

頁122　本文

頁372　補注

分けて、稜威の道別に道別きて、日向の襲の高千穂峯に天降ります。既にして皇孫の遊行す状は、槵日の二上の天浮橋より、浮渚在平処に立たして、立於浮渚在平処、此をば羽企爾磨梨陀毗邏而陀陀志と云ふ。膏宍の空国を、頓丘から国覓ぎ行去りて、頓丘、此をば毗陀烏と云ふ。覓国、此をば矩弐磨儀と云ふ。行去、此をば騰褒屢と云ふ。吾田の長屋の笠狭碕に到ります。

岩波文庫「日本書紀」の「注」に注目

吾田の長屋の笠狭碕

西暦682年（天武11年）の地名から
場所を決めて良いのか？

一一　吾田（一二二頁注一〇）　阿多。吾田国。鹿児島県西部の古称。天武朝で書紀編纂が開始された当時は隼人の地で、天武十一年七月条に、同県東部の大隅隼人と西部の阿多隼人が併称されている。大隅地方よりも早く律令権力が南下、征服したらしく、まもなく唱更国、ついで薩摩国と命名され、大隅国のように国名としては残らなかった。和名抄に薩摩国阿多郡阿多郷。

一二　地名辞書は薩摩国川辺郡の長屋山（今、鹿児島県加世田市と同川辺郡の境）の地名を挙げ、この山付近の地とする。

一三　地名辞書に今の野間岬とする。薩摩半島の西岸、吹上浜の南端に突出した小半島。

海彦・山彦の神話のひとつの解釈

父母の地・本拠地 → 兄弟が育つ → 兄弟が争う → 皇位継承争い → 弟が継承 → 継承者が本拠地に留まる

- 山幸彦と海幸彦の神話は、天孫族の後継者争いの神話と読む。
- 弟の山幸彦＝火遠理命が後継者争いに勝ち、本拠地で皇位継承する。
- 破れた海幸彦＝火照命は、命乞いをして、服従を誓った。
  - その後、本拠地を離れ、遠方の地で、暮らしたと推定する。
  - その遠方の地が隼人の地と推定
  - 吾田君小橋等が本祖なり。日本書紀P164
    - 吾田君は吾田隼人中の有力者。日本書紀P165注七
      - 日本書紀第2書：火酢芹命の苗裔、諸の隼人達。

➢ 注に書かれた隼人の地：薩摩国阿多郡阿多郡は、海幸彦＝火照命に関連する地名と思われ、本拠地の地名では無い。

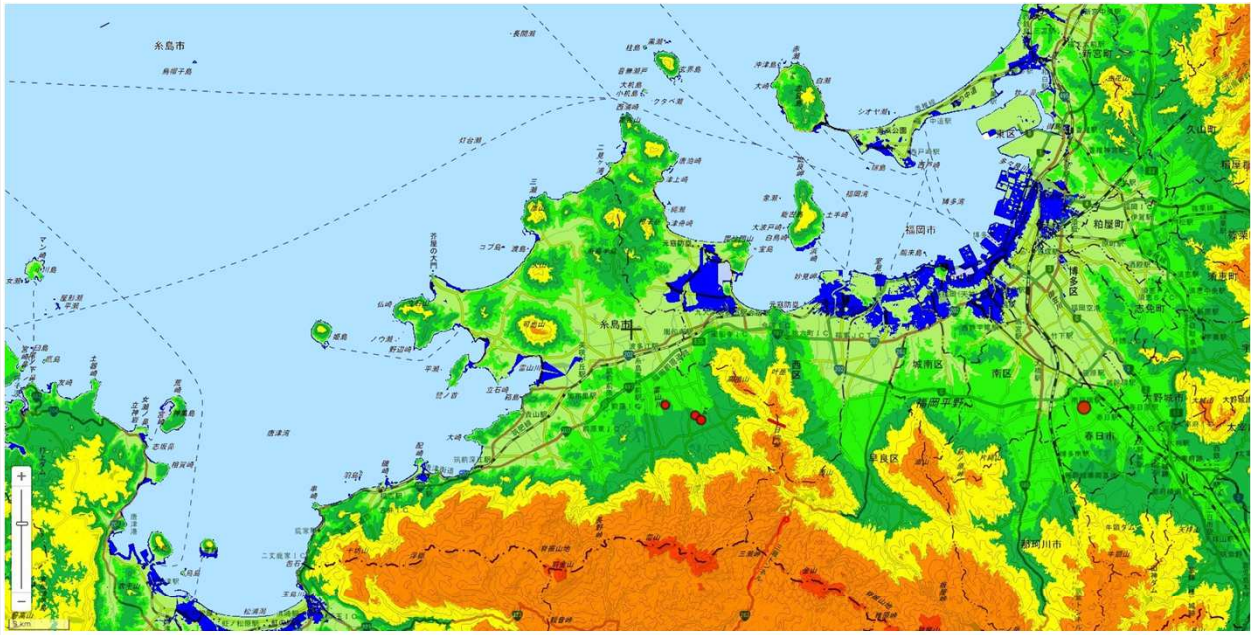
敗れた兄は
本拠地に留まる　？

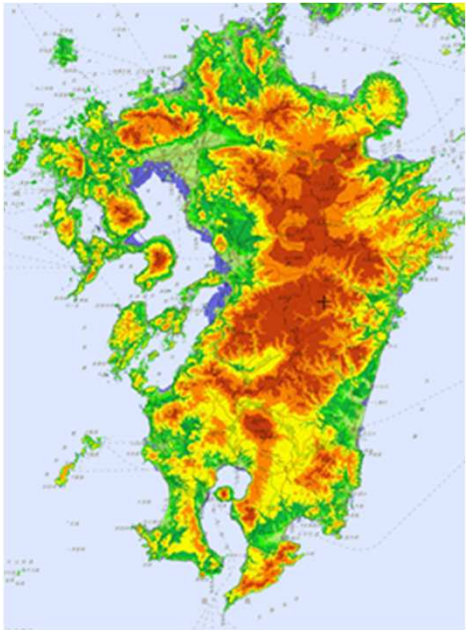
又は

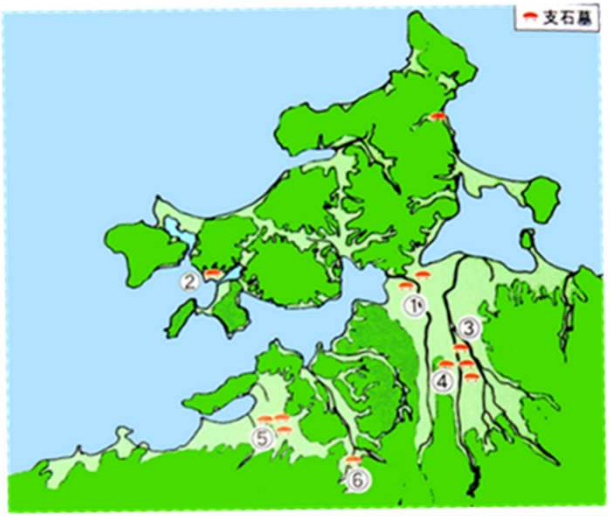
敗れた兄は
本拠地を離れ
遠方の地に移住　？

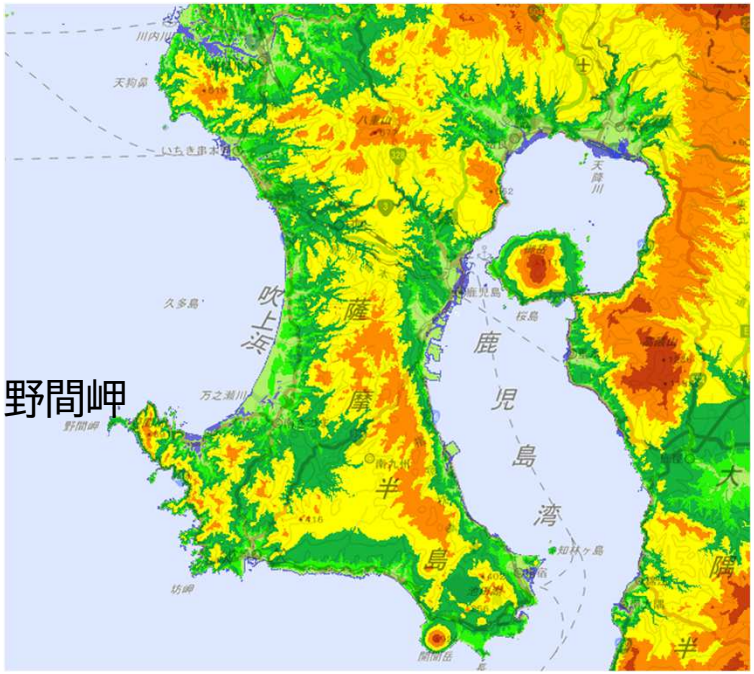
議論　テーマ　1.

- 議論　テーマ　1.　：　天孫降臨し、邇邇芸命の結婚相手を見つけた場所は何処か？









岩波文庫の「注」に注目

真床覆衾とは？

岩波文庫

日本書紀
巻第二

頁190 －
一書四

頁191 注

げて曰はく、「吾、我が王を独能く絶麗くましますと謂ひき。今一の客有り。弥復遠勝りまつれり」といふ。海神聞きて曰はく、「試に察む」といひて、乃ち三の床を設けて請入さしむ。是に、天孫、辺の床にしては、其の両足を拭ふ。中の床にしては、其の両手を拠す。内の床にしては、真床覆衾の上に寛坐る。海神見て、乃ち是天神の孫といふことを知りぬ。益加崇敬ふ、云云。海神、赤女・口女を召して問ふ。時に口女、口より鉤を出して奉る。赤女は即ち赤鯛なり。口女は即ち鰯魚なり。

二 マは美称。床覆は、床をおおう意。フスマは、寝るとき身をおおうもの。瓊瓊杵尊が真床覆衾にくるまって降臨したとあるが、それは王の即位式の反映であると考えられるから、ここに彦火火出見尊が真床覆衾つまり玉座に坐ったことによって、彦火火出見尊が支配者の家系に属すること、つまり天神の孫であることを海神がさとったという意味に解釈できる。→補注2-一一。

時に、高皇産霊尊、真床追衾を以て、皇孫天津彦彦火瓊瓊杵尊に覆ひて、降りまさしむ。皇孫、乃ち天磐座（一一）天磐座、此をば阿麻能以簸矩羅と云ふ。を離ち、且天八重雲を排分けて、稜威の道別に道別きて、日向の襲の高千穂峯に天降ります。既にして皇孫の遊行す状は、槌日の二上の天浮橋より、浮渚在平処に立たして、立於浮渚在平処、此をば羽企爾磨梨陀毗邏而陀陀志と云ふ。膂宍の空国を、頓丘から国覓ぎ行去りて、頓丘、此をば毗陀烏と云ふ。覓国、此をば矩弐磨儀と云ふ。行去、此をば騰褒屢と云ふ。吾田の長屋の笠狭碕に到ります。

岩波文庫の「注」に注目

真床追衾とは？　王の即位の意味

一一　**真床追衾**（一二〇頁注一〇）　マは美称。床追は床覆に同じ。床（トコ）は、坐ったり寝たりする台、高くなっている所。床を覆う衾。フスマは伏ス裳（マ）であるという。真床覆衾は、山幸彦が海宮に行った時に、その上に寛坐したとあり、また豊玉姫が皇孫の子を生んだときに、真床覆衾と草とでその生児をつつんで波激に置いて海に去ったという。この真床覆衾は、大嘗祭の祭儀に、天皇が臥す際に使う衾と関係があるらしい。

三国遺事に引く駕洛国記の首露神話でも、降臨した神子の六耶は、紅幅に包まれて酋長我刀の家にもち帰られ、かつ榻（しと）の上に納められたという。これは真床覆衾と類似している。突厥の新しい王はフェルトの上にのせられ、キルギスの新ハーン（王）推戴の儀式でも新ハーンを白いフェルトの上にのせ、高くほうり上げては落す。護雅夫は、このような例から、真床覆衾も王の即位式の反映と見ている。事実、大嘗祭の悠紀殿・主基殿にしつらえられる蓐・衾もマトコオフフスマと呼ばれており、これと即位式との関係を示している。

第九段で、ニニギが真床覆衾にくるまって降臨したとあるのは王の即位式の反映である。これから考えて、彦火火出見が真床覆衾つまり玉座に坐ったことによって、海神は彦火火出見が支配者の家系に属すること、つまり天神の孫であることをさとったのであると解釈できる。

議論　テーマ2.

- 真床追衾・真床覆衾(まとこおうふすま)とは 何か？
  - 岩波文庫の「日本書紀」の注にあるように、「即位式」を意味するのか？
  - 生児を包むための真床覆衾に包まれて、小さい子供の時期己に降臨した意か？

➢ 岩波文庫の注)では、「追」と「覆」の差異が無いように記述している。

岩波文庫

日本書紀
巻第二

頁130
～132

頁131の注十五
は次頁

→ 130

て曰さく、「天神の求ひたまふ所を、何ぞ奉らざらむや」とまうす。故、大己貴神、其の子の辞を以て、二の神に報す。二の神、乃ち天に昇りて、復命をもて告して曰さく、「葦原中国は、皆已に平け竟へぬ」とまうす。時に天照大神、勅して曰はく、「若し然らば、方に吾が児を降しまつらむ」とのたまふ。且将降しまさむとする間に、皇孫、已に生れたまひぬ。号を天津彦彦火瓊瓊杵尊と曰す。時に奏すること有りて曰はく、「此の皇孫を以て代へて降さむと欲ふ」とのたまふ。故、天照大神、乃ち天津彦彦火瓊瓊杵尊に、八坂瓊の曲玉及び八咫鏡・草薙剣、三種の宝物を賜ふ。又、中臣の上祖天児屋命・忌部の上祖太玉命・猨女の上祖天鈿女命・鏡作の上祖石凝姥命・玉作の上祖玉屋命、凡て五部の神を以て、配へて侍らしむ。因りて、皇孫に勅して曰はく、「葦原の千五百秋の瑞穂の国は、是、吾が子孫の王たるべき地なり。爾皇孫、就でまして治せ。行矣。宝祚の隆えまさむこと、当に天壌と窮り無けむ」とのたまふ。

一〇 已にして降りまさむとする間に、先駆の者還りて白さく、「一の神有りて、天八達之衢に居り。其の鼻の長さ七咫、背の長さ七尺余り。当に七尋と言ふべし。且口尻明り耀れり。眼は八咫鏡の如くして、赩然赤酸醬に似れり」とまうす。即ち従の神を遣して、往きて問はしむ。時に八十万の神有り。皆目勝ちて相問ふこと得ず。故、特に天鈿女に勅して曰はく、「汝は是、目人に勝ちたる者なり。往きて問ふべし」と

岩波文庫「日本書紀」の「注」に注目 ： 天岩戸の説話の次に、この天孫降臨の話が続いていた

一五 以下一三二頁八行まで天孫降臨の話。→一二〇頁注九。ここにいわゆる三種の神宝の授与が述べられる。これは本文にはないが記には見え、第二の一書では鏡だけの授与となっている。なおこれらの神宝のうち八坂瓊の曲玉は第七段(七六頁六行)に、八咫鏡は第七段(七六頁七行)に、草薙剣は第八段(九二頁一一行)にはじめて見える。これらそれぞれの宝物がここで一つに纏められて皇孫に授与される。ここに現われる八咫鏡・天児屋命・太玉命・天鈿女命・石凝姥命などは、すべて、天岩屋に天照大神が隠れた時に関係のあった物と人と神。記紀の物語の構成は、もとは、天岩屋の説話の次に、この天孫降臨の話が続いていたものと見られ、その中間に、素戔嗚尊と出雲の八岐大蛇の話とが割り込んだものである。人物や物が、天岩屋の話と、天孫降臨の一書との間に脈絡があるのは、その結果である。

- 注一五　以下一三二頁八行まで天孫降臨の話。→一二〇頁注九。
  - ここにいわゆる三種の神宝の授与が述べられる。
  - これは本文にはないが記には見え、
    - 第二の一書では鏡だけの授与となっている。
    - なおこれらの神宝のうち八坂瓊の曲玉は第七段(七六頁六行)に、
    - 八咫鏡は第七段(七六頁七行)に、
    - 草薙剣は第八段(九二頁一一行)にはじめて見える。
    - これらそれぞれの宝物がここで一つに纏められて皇孫に授与される。
- ここに現われる八咫鏡・天児屋命・太玉命・天鈿女　命石凝姥命などは、すべて、天岩戸に天照大神が隠れた時に関係のあった物と人と神。

- 記紀の物語の構成は、もとは、
  - 天岩戸の説話の次に、
  - この天孫降臨の話が続いていたものと見られ、
  - その中間に、素戔嗚尊と出雲の八岐大蛇の話とが割り込んだ
    ものである。
  - 人物や物が、天岩戸の話と、天孫降臨の一書との間に脈絡があるのは、その結果である。

天の岩戸と天孫降臨の対比

- **天の岩戸の登場人物**
  - 天照大神
  - 思金神　（思兼神）
  - 天津麻羅 ｛鍛冶師｝
  - 伊斯許理度売命（石凝戸邊）
  - 玉祖命
  - 天児屋命
  - 布刀玉命（太玉命）
  - 天手力男神（手力雄神）
  - 天宇受賣命（天鈿女命）

  - 天明玉
  - 天日鷲

  - 八咫鏡
  - 八尺瓊勾玉

  - 建速須佐之男命

- **天孫降臨の登場人物**
  - 天忍穂耳命
  - 邇邇藝命
  - 猿田毘古神
  - 天児屋命、
  - 布刀玉命、
  - 天宇受売命、
  - 伊斯許理度売命、
  - 玉祖命
  - 思金神、
  - 手力男神、
  - 天石門別神
  - 登由宇気神
  - 天忍日命
  - 天津久米命

  - 三種の神器

✓ 天孫降臨の主要な従者は、天岩戸事件の主要な人物と同じ。
　➢ 天の岩戸事件の、何年ぐらい後だろうか？
✓ 三種の神器を持ち、葦原水穂の國を治めるために天降る。
　➢ この天孫降臨をどう理解すべきか？

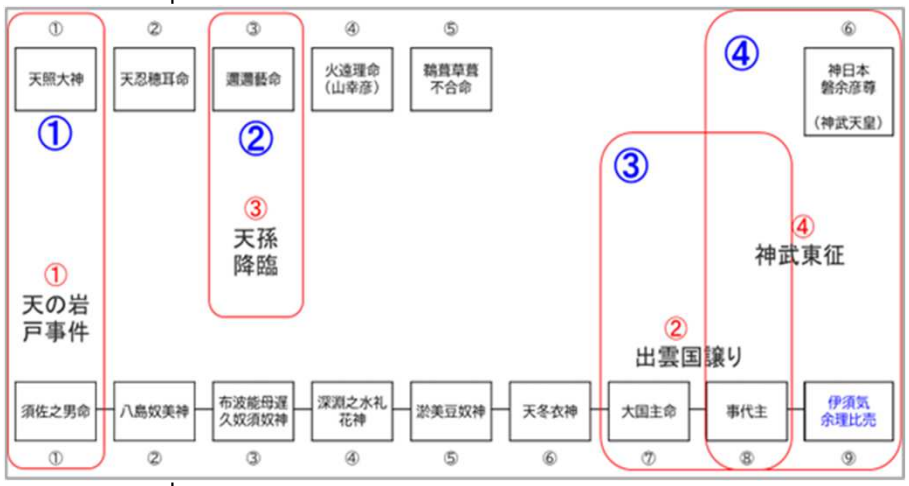
邇邇藝命の降臨の状況は？

- 日本書紀第九段本文
  - 真床追衾を以て、皇孫天津彦彦火瓊瓊杵尊に覆ひて降しむ。
    - 岩波文庫の補注11によれば、「王の即位式の反映である」
    - 王の即位式が行われたことを示している。
  - 三種の神器が邇邇芸命に授けられた
    - 八尺瓊勾玉（やさかにのまがたま）：大きな勾玉とも、長い緒に繋いだ勾玉
    - 八咫鏡（やたのかがみ）：八咫鏡は直径2尺（46cm） 前後）、円周約147cmの円鏡
    - 草薙剣（くさなぎのつるぎ）
  - 五部の神たちを同伴
    - 天児屋命　　：　中臣の祖先
    - 布刀玉命　　：　忌部の祖先
    - 天宇受売命　　：　猿女の祖先
    - 伊斯許理度売命：　鏡作の祖先
    - 玉祖命　　：　玉作の祖先
  - 軍隊の長
    - 天忍日命
    - 天津久米命
- 古事記
  - 邇邇芸命に、「豐葦原水穂國は、汝知らさむ國ぞ」と、葦原中つ国の統治を託した。
    - 三種の神器・同伴する人々は日本書紀本文と同様

- 岩波文庫の注の通りならば　：　邇邇藝命の降臨は、正式に皇位継承の儀式を行い、皇位の印である三種の神器と持参し、皇位を維持する政務担当の主要な人物を従え、玉作・鏡部など工業生産の技術者を率いたもの。
  - 少人数の移動では無く、一国の主と主要部隊を含む大移動と見える。

議論　テーマ 3. 及び　テーマ 4.

- テーマ 3.　：　天孫降臨の時期は、何時か？
  - 出雲国譲りの後か？
  - 天岩戸事件の後か？



- テーマ4.　：　天孫降臨に参加して人の規模は？
  - 十数人程度の少数　？
  - 数百人規模　？
  - 数千人規模　？

議論　テーマ 5. 及び　テーマ 6.

テーマ 5.：　記述の理由は？

1　年数･代数をかせぐために追加された
2　史実を神話化して隠ぺいした
3　ほぼ史実どおり

テーマ 6.：　日向三代の場所を知るにはどんな証拠が有るのか？

- 神社伝承
- 土器
- 武器
- 戦傷遺跡
- 青銅祭器の埋納
- 墓･甕棺･古墳
- 王墓